

第2期 連続研修会

（平成26年11月～平成28年2月）

主催：広陵東組実践運動推進委員会

第12回 テーマ

御同朋の社会について
—平等と差別—

公開講座／パネルディスカッション

第12回れんけんは、公開講座及びパネルディスカッション。講師兼パネラーに藤井聡之師（沼田組教雲寺）と齋藤英明師（本願寺広島別院副輪番）を迎え、広陵東組連研副部長原田真澄がコーディネートします。

「この共命ホールの名前の由来は共命鳥。身体はひとつで双頭のこの鳥は互いに傷つけ合い結局死んでしまう。現在空爆とテロで報復し合うフランスとシリアのようだ。正義の名の下に悪が行使されるこの世界情勢において、平等・差別とは何か、しっかりと考えて欲しい。」（碓井真行副組長挨拶）【平成27年12月19日／於：共命ホール（本願寺広島別院）／参加者：27名（連研受講者及び仏仕仏婦部会々員）】



共命鳥

共命ホール

2011(平成23)年6月、安芸教区「親鸞聖人750回大遠忌法要」記念事業の一環として完成。法要儀式だけでなく、各種研修・催し等に、柔軟に対応する多目的ホール。300名を収容。



以前は役場の戸籍が「身元調査」に利用されてきた経過がありますが、行政の対応が進展する中で、役場に替わって寺院にある記録や放置された個人情報の中から「身元情報」を取得して富を得ようとする「情報屋」の動きは終息していません。

合掌



公開講座

① 御同朋の社会をめぐって
〜教団と差別問題〜

藤井聡之

組連研の研修内容として、「なぜ差別問題を取上げなければならぬのか？」とか「部落差別については、門信徒でいろいろな考え方があろう。だから問題には触らないほうが良いのではないか？」といった意見は、安芸教区内でも随分前から耳にした意見です。全国の中には、差別問題を「抜いて」組連研に取り組むところもあると聞いています。その意味で、今

回こうした研修のあることに対し敬意を表したいと思います。私自身は、今までの学びから、教団が『御同朋の社会をめぐって』と掲げる限り、部落差別を中心とした社会の問題を無視して歩むことはできず、避けることはできないと考えています。なかなか一般寺院の法座では掲げにくい現状の中で、組連研だけが「教団と差別」のテーマとすることができる貴重な機会ではないかとさえ思います。親鸞聖人のご一生は「具縛の凡愚、屠沽の下類」と当時位置づけられた人々を「念仏の仲間たち」とされたのでした。その苦悩多き人生を歩む人々を「われら」とされ連帯して生きられたのが親鸞聖人の人生でした。私たちの教団は、その「御同朋の精神」を教団の旗頭としてきました。

しかし、皮肉にも長い歴史の中で、「御同朋の精神」を忘れし、教団そのものの制度の中にさえも差別（穢寺・穢僧）を取り込み、またご門徒の人々を差別していることに気付くことなく、『ご法義を喜ぶ』僧侶の姿に何のためらいもなかった姿がありました。そうした体質化した差別意識は、明治に解放令が出された後も幾度となく教団の現実として、差別発言（事件）となつて表面化していくのでした。そして、一教団を超えて日本全国の仏教界が問われたのが、いわゆる一九七九年の「町田発言」（日本には、部落差別はないとの主旨）でした。

これを契機に本願寺教団に於いても、取り組みを余儀なくされ、一九九七年には「過去帳差別記載調査」によって多くの寺院が「世俗の風潮」に取り込まれ差別に荷担した足元の事実が顕かとなりました。そして、教団の基幹運動としての組織的な研修体制が整えられ「同朋研修」や「連研活動」として、研修が

よって当然、それぞれの真宗寺院も対応していく必要性に迫られているのです。無論、「必要性に迫られているから」活動するのでは、「御同朋の社会をめぐって」実践運動としては自主性に欠けるとのご批判もございましょうが、情報社会の中で「個人情報保護」については即刻対応せざるを得ないことと認識すべきだと思えます。

講師・パネリスト紹介



ふじい そうし
藤井 聡之

1954（昭和29）年
11月8日生

沼田組教雲寺住職
安芸教区同朋部会委員
同和教育振興会理事

門信徒との学習会や語らいを、何よりの楽しみとしている山寺の住職です。宗祖のご消息にあります「無明の酔ひもやうやうすこしづつさめ・・・」を実感しつつ、還暦を過ぎた身を生きていこうと考えている今日この頃です。趣味は読書と温泉旅行。

講師・パネリスト紹介

さいとう ひであき
齋藤英明

1967 (昭和42) 年
12月30日生

本願寺広島別院
副輪番
／安芸教区教務所
賛事



趣味・特技といったものについて、改めて考えると思い当たりませんが、身の回りにある様々なことに興味、関心がある男です。山口県萩市出身。

② 提言

齋藤英明

昨年を表す漢字は、様々な「不安」要素から「安」を探すと「世のなか安穏なれ」が思い当たり「仏法ひろまれ」と続きます。宗祖のお流れをくむお互いとして、仏法による世の安穏への歩みを一緒にしたいものです。

連研は、現実の中で仏法に問いながらの歩みです。かつて、人々は都市部に移住し、また一方では新興宗教が台頭する中で、各地のお寺は危機感を強く持ちました。その現実からの取り組みが連研であり、宗門の門信徒会運動の柱でした。後に、いのちの尊厳を脅かす差別問題に取り組み仲間運動と一本化し、永く宗門の基幹をなす運動として続けられ、その成果を継承して平成24年度から「御同朋の社会をめざす運動(実践運動)」と

して歩みを続けています。実践運動の特徴は、全員で取り組もうとするところであり、大切なことを現実の中でしっかりと見失うことなく捉え、皆で取り組むことです。

かつて、秋葉広島市長の「平和宣言」骨子案で米国ブッシュ大統領の有り様を「唯我独尊主義」と表現したことが話題になり、別院に「何とかしろ」と電話が鳴り響いたことがありました。別院職員は「今の内容を市役所にも」と伝えると、「私が言っても」「二住職が伝えても」「別院が言わんと」と言われたが、8月6日の宣言では言葉が置き換わりました。誤りを指摘する行動を共に行うことによる成果を実感したことです。

差別、平和・靖国の問題は、連研では避ける傾向があるようです。政治的、イデオロギーで向き合うとどうしても意見が対立するからです。私たちは仏教徒としてどこに立ち、どうあるべきなのかを現実の中において仏法に問いながら、しっかりと歩まなければなりません。

パネリストコメント

原田真澄 コーディネーター
今日のテーマの一つ、「平等」という言葉です。一体何をして平等と言えるのか、先ずそのことをお伺いしたいと思います。

【藤井】 全ての命を受けとめ活かそうとする大地のような場それが平等だと思えます。例えば、今この時を大切な時間だと、皆が言えるような場。誰一人として嫌だと感じない、あなたはあなたのままがいいと、互いに違いを認め合う世界が平等ではないでしょうか。皆、価値観は違うけれども、その違いを認め合う中で、皆の命が同じよう尊重され、生きて行くことが実現していく、それが出来たら素晴らしいことだと思います。

【齋藤】 「平等」について日暮しの中に引き当てる考えた時周りの人たちに対して同じ様に心を配れているか、ということではないかと思えます。自分の都合や立場によって態度を変えてないか。折に触れ配慮を欠いていないか。浄土に畜生はいないと説かれています。畜生と言うのは弱肉強食、自分が生きることにしか頭のない状態でしょう。他人に気を配ることが出来なくなった時、私達は畜生になっていく。そんな我が身を省みつつ「平等」を目指していくことが大切ではないでしょうか。

原田 反対に「差別」とは一体どういうものなのか。なぜ人は「差別」をするのでしょうか。

【藤井】 私は「差別をすることに気が付かない私」でありました。私に差別を気付かせてくれたのは、差別を受けた人、実際に痛みを感じた人の告発です。例えば女性問題というのは実は男性の問題です。先ず差別している側がそれに気づいていないところが問題なのです。二つには、人間には、己を是として他を非とする抜きがたい執着があります。その一番根底にあるのが異質なものを認めないという思いです。三つには「十把一絡」という言葉がありますが、本当は個々は複雑でそれぞれ事情が違うのに全部同じように見してしまう。例えば「女っていうものは…」など簡単に括って偏見を持ってしまふ。大まかにそのような三つのことが差別の温床になっていると感じています。

【齋藤】 傍観者はどちらかというと力の大きい側につきます。その大きい方が差別する側であったなら、傍観者にその気がなくとも差別に加担していることとなります。誕生日の「誕」という字には「でたらめ」という意味もあります。人は生まれた時からでたらめな生き方をしている。仏様の願いはそんな私達をでたらめで終わらせないとはいって下さっている。その願いに叶った生き方をしていくということが大事です。具体的には、でたらめな自分を反省し、もし間違いに気付いたら、開き直るのではなくてキッチンと謝り是正していけるかどうかでしょう。

原田 最後に御同朋の社会とは

一体どのような社会を言つのか。その社会を目指すにはどのようなすれば良いのでしょうか。

【藤井】 阿弥陀様の耳は大きく表現されている。あれは私達の声を聞くだけの耳ではなく「声なき声」を聞く耳でもありましょう。我々が苦悩の底に沈んだ時は声も出ません。白骨の御文章に「あわれといふもなかなかおろかなり」という御文があります。あれは「お馬鹿さん」という意味ではなく「声にならない」という苦悩です。そして苦悩のないところには願いは建てられません。つまり私達の声にならない苦悩をも全部聞き受けて、四十八願という願いが建てられているのでしょうか。

六道の畜生という世界は、コミュニケーション不全に陥った状況を言うんだらうと思います。コミュニケーションが出来ないから、相手の思いなど云々、勝つか負けるか力技でやっつけてしまふ。それを畜生と言ひ、そういう世界が戦争を作ってしまう、戦争故にコミュニケーションが持てなくなる。

だから、御同朋の社会を実現するには、声にならない苦悩にも耳を傾けていくということが、その第一歩だと思えます。今まで問題にならなかったことにも、声にならない苦悩があるかも知れない。そこに向き合ってみる、考えてみる。大きな声の者が勝ち弱い者の声が沈んでしまふ、そういう場に気付いたなら、皆の意見が尊重されるよう変えていく。苦情を直接言う方は強い方です。そうでない方は黙って

おられます。声にならない痛みを考えていかねばならない。もう一点は、僧侶も門信徒もお互いが御同朋として向き合っていくことだと思います。平座で向き合って、先ずは話し合い。言葉の無い世界は畜生です。話し合いのある場で人間を回復し、お互いが分かり合える耳と目と心を持っている存在として向き合ってみる。それが御同朋の社会を目指すということではないでしょうか。

【齋藤】 私達は帰敬式の際に、仏様に対する誓いとして三帰依文をお唱えします。その一つ「南無帰依僧」の僧は特定の僧侶のことを言うのではありません。全ての者を救うと願いはたらい下さっている仏様、そしてそのみ教えである仏法、その二つの宝を拠り所とする仲間のことです。その仲間を宝として、また拠り所として生きて行く誓いが「南無帰依僧」。つまり自分勝手に生きるのではなく、周りの方々と共に歩んで行くことが仏教徒としての在り方でしょう。そこには自ずから対話が生まれ時には共に汗を流すこともあるでしょう。対立ではなく協調、一緒に歩いていくこと、それが御同朋の社会を目指すという

ことではないでしょうか。

